

## 夜桜幻想

鈴木 桂子

春

里見公園に続く桜並木に  
提灯が灯される

それが

職場の窓からよく見える

夜桜見物のためなのだろう  
でも

私にはなぜかそれは

「狐の嫁入り」を思わせた

残業でとっぷり暮れた

春の宵

家路につけば

ぼんやり光る花のみち

きつとあの下で

桜に魅かれた妖あやかしたちが

酒盛りをしているに違いない

私は人間だから

あそこへは行けない

幼いころ

「おもちゃや人形は

人が見ていないところで  
動いているのよ」と  
母に教わった

人間が行ったら  
邪魔をしてしまう  
だから  
そっとして  
おかなくてはいけない

遠くから見ると  
夜は異次元

公園では  
無念に散った里見の武士たちも  
紫煙をくゆらせながら白秋も  
きつと桜を愛でているだろう

そんな幻想を  
ひととき抱くのが  
毎年のたのしみだったのに

今年は  
いくら待っても  
桜並木は暗のまま

来年の  
彼らの出番を待ちながら  
今は蝉時雨を聴いている